〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ19

国指定重要文化財 紫裾濃鎧の大袖

日本風俗史学会会員
青梅市文化財保護審議会会長 齋藤慎一

騎射戦のための大鎧は、楯となるのが左右の大袖で左側が射向（弓手）の袖、右が馬手の袖です。全体は鉄板の冠板、化粧板、その下に続く小札でつくる板が六段、板を綴る威糸、四本の緒、裏面の四個の鐶（受緒・執加緒・懸緒・水呑緒の鐶）で形成します。

鎧の年代の古さは、小札幅の数値で基本的に判定され、幅は年代の下降と共に狭くなります。構造的にいうと一定幅に小札が何枚あるかです。小札の観察には大袖が比較的便利です。最も古い大袖の例では、厳島神社蔵・国宝小桜威鎧は小札幅5cm、小札板幅33cmに小札18枚です。御嶽神社の国宝赤糸威鎧は小札幅3.85cm、板幅33cmに22枚で平安後期。厳島神社蔵・国宝黒糸威鎧は小札幅3.1～3.2cmで板幅35.5cmに28枚、平安末期から鎌倉初期の数値とされています。

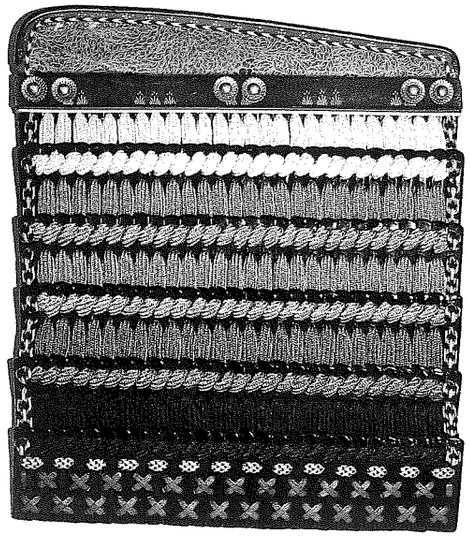
紫裾濃の場合、一段の小札数は同じ28枚ですが小札板幅は少し狭く33cm、小札幅2.7～2.8cmですから、黒糸威より年代が少し下り鎌倉前期です。その上、黒糸威の大袖の六段はすべて革小札なのに紫裾濃の大袖は上の二段が鉄交（前端は三枚目から、後端は二枚目から革札と交互に一三枚の鉄小札）とするのは、進歩した形なので、鎌倉初期より下り鎌倉前期の制作です。三段目には古い小札が最も残って、以下各段革小札です。

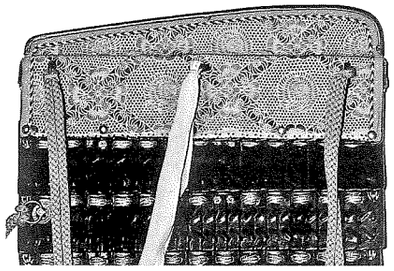
紫裾濃鎧の冠板は棚作の立冠板で左右不対称の櫛形の輪郭で底辺は32cm、前端の高さ5cm、やや角ばる後端は高さ2.6cm、中程はかすかな曲線で高さ4.25cm。平安末の厳島神社の黒糸威鎧の大袖の冠板の櫛形のなだらかな前端よりも紫裾濃は角張り強く鎌倉前期の輪郭で、まだ横方向への撓は少ない。棚幅1.5cm、二箇所に小札板を吊り上げた赤韋の結び目が見えます。一段目小札板の裏に重なる棚につづく足は、長さ1.9cm、三箇所を3.2～3.8cm幅で切り欠いた切欠式。鎌倉中期以降の一文字式より古式です。冠板表面の藻獅子の絵韋と小縁の五星赤韋、白と紫の伏組、また裏面の盤絵獅子文絵韋は一段目の小札板の下辺まで包み、小刻座付笠鋲五個でとめますが、すべて新補です。一方、前記厳島の黒糸威の大袖は表裏共に盤絵獅子文絵韋で、裏側には小縁・伏組なく下辺は鋲でなく赤韋で結びとめます。新補の絵韋・小縁・鋲は、鎌倉前期の小札の特徴をもつ紫裾濃の大袖には新しすぎる意匠です。鍍銀の覆輪の裏側中央に鼻をつけ表から釘を通してとめる形も鎌倉中期以降の様式なので疑問が残ります。寛政一三年（一八〇一）調査の「集古十種」には、中央の釘も裏側の鼻も描かれていません。

化粧板の藍染菖蒲韋は高さ2.1cmで新補。三箇所に一対あて打ったすきだし彫の菊座二重の八双鋲は、胴や梅檀板の鋲を模したもので新補、「集古十種」に「八双金物アトモ無之」とあって、もとの形は不明なのです。化粧板下辺の紅白の水引は竹ひご二本に赤韋や白綾を巻き、そのへりを化粧板で押えますが「集古十種」の記述による新補です。

袖裏の鐶は、冠板の足の三つの切欠部分の一段目小札（四つ目札）の縄目の上の孔に打ち、表で足をひらきとめています。中央は大袖を肩上に取り付ける大事な執加緒鐶、前

の方は肩上の先に結ぶ受緒鐶、後は総角に結ぶ懸緒鐶です。中央の鐶は南北朝期になると袖が前方によって突き出るように後寄りに打つのが定式となりますが紫裾濃はほぼ中央に打っていて古式です。鐶はまだ黒漆塗の鉄製で、時代と共に金銅装や金銅製となり大きくなる傾向ですが、紫裾濃は長径1.5cm、短径1.35cmとまだ小ぶりです。中央の鐶は現在横方向に、前後は縦に打っていますが、これは鎌倉後期以降の様式で、御嶽の赤糸威や厳島の黒糸威と同じように三鐶共に縦方向にすべきです。「集古十種」には縦鐶を描き「袖鐶三所同向に打之」とあります。右側の袖の前と中央の鐶は新補。





〔右〕紫裾濃鎧の左（弓手）の大袖
〔上〕その裏面の小札板の三段目まで。
左から水呑緒、懸緒、執加緒、受緒。

大袖の威糸や、畝目・耳糸は全部新補。配色は「集古十種」にも記載せず、寛政九年（一七九五）序の幕府御用具足師春田永年編「甲組類鑑」に「武州御嶽神社所蔵古鎧、異製紫裾濃」として彩色図示しますが、現在は白・黄・薄紫・中紫・紫の配色でも新補します。耳糸は「集古十種」の白・黄・紺・葱黄の亀甲組の図により新補。畝目も同じ配色の小石打の新補。草摺や逆板にも古い糸が残ります。耳糸や畝目の組紐に黄糸が入ることは、紫裾濃の威色に黄色が入る点と共通します。しかし本来、大袖は鎌倉中期の胴や兜よりも一時代古い年代のものですから耳糸や畝目は、もとは赤糸威や黒糸威と同じ鷹羽打の組紐だったかもしれません。

菱縫の赤革は「集古十種」に下搦だけ残るとあるように全部新補です。大袖の小札板の各段の下搦は、上・下共に二本搦なのに、胴や草摺は上二本搦、下一本搦と仕立が異なっている点も注意すべきです。

また三段目の小札板の裏で、後端から二枚目の小札の毛立の下に打った、すき出し彫菊座二重小刻座二重の切子頭の水呑緒の鐶台は左右とも新補。「集古十種」に欠失とあり、もとの位置や形は不明です。平安後期の赤糸威は裏に、厳島の黒糸威は表に打つので紫裾濃も表に打つべきかもしれません。右袖裏にあるべき矢摺韋（籠手摺）は付けず、「集古十種」にも「籠手摺アトモ無シ」とあります。袖の総長は37.8cm、化粧板まで32.7cm。左袖1.69kg、右袖1.75kg（緒所共）。

紫裾濃鎧の大袖は小札の特徴から鎌倉前期で、厳島の黒糸威につづく遺例です。現在、この大袖がついている同じ紫裾濃威の兜や胴などは鎌倉中期の制作です。むかし御嶽には、年代の異なる二領の紫裾濃があったのでしょうか。

甲冑の数値等すべて山岸素夫先生の「日本甲冑論集」「日本甲冑の実証的研究」の学恩です。筆者は先生の門下として、各調査に随行、ご指導を得て本稿を草しました。